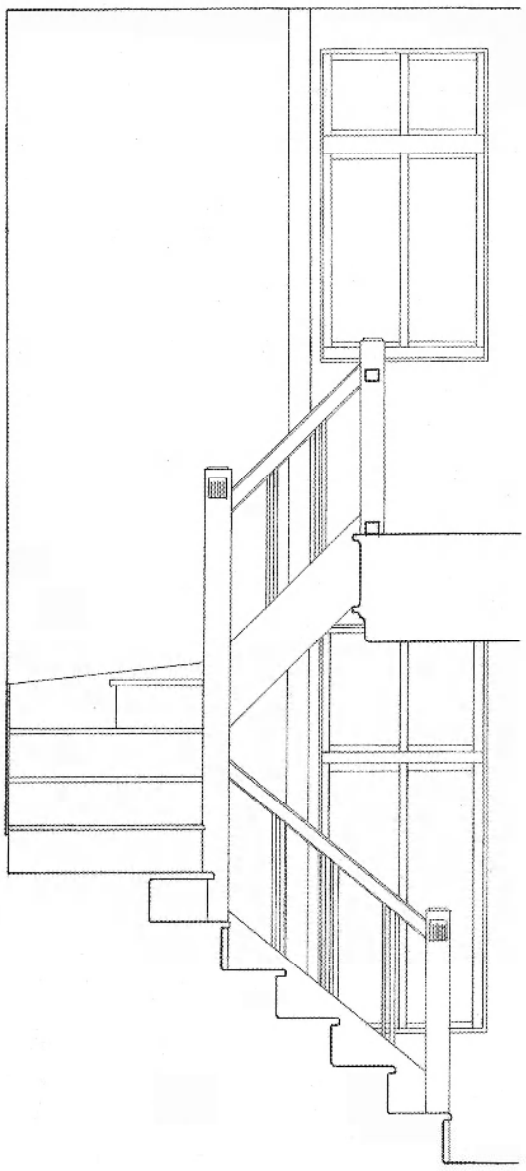


愛荘町でみる

国の登録有形文化財

あいしょうちょう えち がわ
愛荘町愛知川観光協会　編

愛知川駅ギャラリー るーぶる愛知川（えちがわ）

目　　次

解説
地域文化の再発見のすすめ　・・・　2

事例紹介
愛知川の鉄橋　・・・　3
日本料理　竹平楼　・・・　4
季節料理　近江商人亭　・・・　5
蔵元　藤居本家　・・・　6
西澤家住宅洋館　・・・　7
蔵元　丸中醤油　・・・　8
宇曽川流路工　・・・　9

資料
関係地図　・・・　10

写　真
高田　久良　TAKADA, Hisayoshi
1943年生　写真家
スタジオ・タカダ

解　説
福持　昌之　FUKUMOCHI, Masayuki
1970年生　民俗学、日本文化史専攻
愛荘町愛知川観光協会事務局長・学芸員

凡　例

○ 本書は、平成21年3月1日より3月27日までを会期として、愛知川駅ギャラリーる一ぶる愛知川で開催した企画展示「愛荘町でみる 国の登録有形文化財」の展示解説書である。

○ この展覧会は、愛荘町教育委員会（担当者・三井義勝学芸員）と愛荘町愛知川観光協会が、平成20年秋の文化財登録を記念して企画展の開催を準備した。資料提供および各文化財の所有者との連絡調整などにおいて、愛荘町教育委員会の協力を得た。

○ この展覧会で使用した写真は、今回新たに撮影（平成21年2月）したものである。

表紙写真（上段右より）　近江鉄道愛知川橋梁、西澤家住宅洋館、藤居本家東蔵（3 枚）、近江商人亭大広間、竹平楼（2 枚）、丸中醤油店舗、近江商人亭主屋、宇曽川流路工碑、丸中醤油醸造蔵、宇曽川流路工（撮影高田久良）

表紙の挿図（右上）　西澤家住宅洋館階段立面図（出典『近江 愛知川町の歴史』第四巻より）

地域文化の再発見のすすめ

■日本の文化財の魅力■

日本は一千年以上、王朝の交代がほとんどないという稀有な歴史を歩み、現在に至っている。確かに、幕末から明治維新や敗戦後の混乱は大きな変革期だったが、焚書坑儒や文化大革命 など中国の歴史でしばしば文化の断絶が見られることに比べて、日本はその継承が円滑におこなわれてきたといえる。

日本はまた歴史的な資料が豊富な国でもある。高温多湿の気候に合った校倉造の正倉院は、聖武天皇以来の宝物を現在に伝えている。化学的に安定した和紙と墨による記録方法は、現代でも保存に適した文書の保存形式といわれおり、古い寺院などから、未調査の古文書が発見されることある。そういった古い寺院は、世界最古の木造建築物である法隆寺をはじめ、全国に点在している。

その一方で、神社建築は伊勢神宮で二十年に一度おこなわれる式年遷宮のように、定期的に建て替えられるものもある。しかし、古い技法そのままに社殿から調度品まですべてを作り替えることは、伝統的な工芸技術、建築技術が次の世代に引き継がれる教育の機会であり、そこに無形の文化財としての価値がある。

■広がりつつ、深まりつつある文化財■

人々はかつて、希少で高価な文物を宝物と呼んだ。権力者はそういった財宝を蓄積し、後世に伝えられて文化財となっているものも多い。しかし現在、人類にとって必要で価値あるものは、財宝だけではないことがわかってきた。価値は多様化し、時代や地域によってもその基準が異なることが、当たり前のこととして、理解されるようになってきた。

日本でも「国宝保存法」は戦後、「文化財保護法」に改まり、さらには芸術、芸能、技術伝承といった無形の文化財も取り入れるようになった。いわゆる「人間国宝」とは、国が指定する無形文化財の保持者を指す言葉である。

文化財保護法によれば、文化財としての選定基準は、歴史、芸術、学術のうえで価値の高いもの、生活の推移や、生業の理解のために必要なものとされている。そこには、従来の「宝物」のイメージに見られるような、その時代の先端を行く中央志向の文化だけでなく、地方の文化や日常的な生活文化なども含まれている。山村漁村の生業やそれに必要な道具、民間信仰や祭礼行事、そしてそれに伴う歌や踊りといった民俗芸能などが、私たちが共有する文化財（有形民俗文化財、無形民俗文化財など）として認識されるようになった。

また近年は、城下町や宿場町といった歴史的景観を形成する建物群を一括して考える「重要伝統的建造物群保存地区」や、そこに生きる人々の生活や風土そのものに注目した「重要文化的景観」といった、新しい文化財の考え方もあり、愛荘町の近くでも、東近江市五個荘金堂（伝建）、近江八幡の水郷（文化景観）などが知られている。

■国の登録有形文化財とは■

高度経済成長期、近代の建築物は急速に失われていった。そのなかで昭和四十年に博物館明治村（愛知県犬山市）が発足し、全国から近代建築を移築して、保存・活用に取組んだ。

登録有形文化財とは、平成八年の文化財保護法の改正によって始まった、近代建築の保護の制度であり、おおむね建築後五十年以上経過した建築物（平成十六年以降は建築物に限らない）が対象になっている。

愛荘町域では、平成十二年に竹平楼と藤居本家（住宅）、平成十三年に宇曽川流路工が国の登録有形文化財となった。その後、『近江 愛知川町の歴史』『秦荘の歴史』の編纂の過程で調査された建造物のなかから、近江鉄道愛知川橋梁、旧田中家住宅、藤居本家（蔵ほか）、旧伊藤製材所社屋、丸中醤油が新たに登録され、その総数は二十件となった。

■文化の再発見は、身近なところから■

滋賀県では豊郷小学校（豊郷町）や今津教会（高島市）など、昭和初期に活躍したヴォーリズの建築物が注目されている。愛荘町でも、旧愛知郡役所（大正十一年）をはじめ、古い写真館や神社仏閣など、文化財として登録されていなくても、文化財に相当するものがたくさんある。

この機会に、ぜひ身の回りにある歴史的な景観の魅力を再発見してもらいたいと思う。

愛知川の鉄橋 えちがわのてっきょう	滋賀県愛知郡愛荘町愛知川～東近江市簗瀬		
近江鉄道愛知川橋梁	1件	明治 31 年建設	平成 20 年 10 月 23 日登録

国道８号の御幸橋から、近江鉄道の赤い鉄橋が見えます。明治 31 年（1898）6 月に彦根～愛知川から開業した近江鉄道は、同年 7 月に愛知川～八日市まで延伸し、愛知川の鉄橋はその際に建設されました。開業以来 100 年以上が経過した現在も、現役として使用されている貴重な歴史遺産です。

この鉄橋は、正式には「愛知川橋梁」といいます。全長は約 239mで、花崗岩切石積みの橋脚９基をつなぐ１０連の鉄道橋です。愛荘町側の１連だけは、三角形を上下交互に並べたような形の構造物でレールを横から支える鉄橋で、ワーレントラス橋といいます。他の９連は、I 型の鉄材でレールを下から支えるプレードガーダー橋です。一般に短い橋にはプレートガーダー橋が多く、橋脚と橋脚の間が広いときにはトラス橋、さらに広がるとアーチ橋や吊橋といった構造が使用されます。

ワーレントラスの上弦材には、製造年 （1897）と製造会社の名称と所在地 （A.HANDYSIDE&COLTD／DERBY&LONDON）が陽刻された銘板が取り付けられていましたが、現在は取り外され、近江鉄道で保管されています。

・・・

法量･構造等　　鋼製９連桁及び単トラス桁橋、橋長 239m、橋台及び橋脚付

参 考 資 料　　白木正俊「近江鉄道愛知川鉄橋・宇曽川鉄橋」（『近江 愛知川町の歴史』第四巻、愛荘町、平成 19 年）

辻　良樹『関西鉄道考古学探見』（JTB パブリッシング、平成 19 年）

愛 荘 町「有形文化財の登録について」（報道資料、平成 20 年）

日本料理　竹平楼 たけへいろう	滋賀県愛知郡愛荘町愛知川1608		0749-42-4007
竹平楼御在所	1 件	明治 11 年建設	平成 12 年 12 月 20 日登録
竹平楼広間	1 件	明治 44 年建設	平成 12 年 12 月 20 日登録

中山道にかかる不飲橋から、少し北にあがったところにある竹平楼は、宝暦 8 年（1758）創業の老舗です。もとは、竹の子屋という屋号の旅籠でしたが、明治 30 年頃に四代目が竹平楼と改め、現在は料亭として営業しています。

明治 11 年（1878）に明治天皇が北陸を巡幸した際、10 月 12 日と 10 月 22 日に、竹の子屋を訪れ、小休されました。御座所は、五個荘（現、東近江市）の堂宮大工・市田辰蔵による数奇屋建築で、付書院がついた主室 8 畳と、次の間 6 畳 2 室がひとつづきになっており、庭側から次の間の下にかけてＬ型に縁がめぐらされています。市田辰蔵は、急ぎの普請の要請に、たまたま建設途中だった数奇屋を移築し、玄関や門を新築して間に合わせたと伝えられています。

広間は、明治 43 年（1910）に今在家（現、東近江市）の大工・木澤助次郎が建てられたものです。10 畳の座敷 6 室からなる 60 畳の広さがあります。この広間の建設に際して、御在所は現在の位置に曳家されました。

明治 45 年（1912）、愛知郡長今井兼寛の発議により、行幸記念祭の開催が愛知郡会で決議され、御幸会が発足しました。第一回目は明治天皇崩御にともない追悼祭となりましたが、以来毎年（戦後の 10 年間を除く）、御幸会の祭典を 10 月 12 日に開催しています。

また、この御在所で結婚式を挙げ、広間で披露宴をされたかたも多いそうです。

・・

法量･構造等　　御在所･･･木造平屋建、瓦葺、建築面積 64 ㎡、入母屋造、桟瓦葺

広　間･･･木造平屋建、瓦葺、建築面積 183 ㎡、舟底天井

参 考 資 料　　白木正俊「料理旅館 竹平楼」（『近江 愛知川町の歴史』第四巻、愛荘町、平成 19 年）

原島知子「折々の儀礼―人生儀礼」（『近江 愛知川町の歴史』第三巻、愛荘町、平成 20 年）

竹平楼リーフレット

愛荘町ホームページ「文化財」 http://www.town.aisho.shiga.jp/main/03_kyouikubunka/03_bunkazai/01_bunkazai.html

季節料理　**近江商人亭** おうみしょうにんてい	滋賀県愛知郡愛荘町中宿51		0749-42-3131
旧田中家住宅(近江商人亭)主屋	1件	大正 8 年建設	平成 20 年 10 月 23 日登録
旧田中家住宅(近江商人亭)大広間	1件	大正 8 年頃建設	平成 20 年 10 月 23 日登録
旧田中家住宅(近江商人亭)茶室	1件	大正 8 年頃建設	平成 20 年 10 月 23 日登録
旧田中家住宅(近江商人亭)南土蔵	1件	明治 25 年建設	平成 20 年 10 月 23 日登録
旧田中家住宅(近江商人亭)北土蔵	1件	大正 8 年頃建設	平成 20 年 10 月 23 日登録

中山道の愛知川宿を抜けると中宿の町並みが続きます。趣のある塀に囲まれた近江商人亭は、もともと田中新左衛門の屋敷として明治 25 年（1892）から大正 8 年頃（1919 頃）にかけて建てられました。現在は、平成６年（1998）からは料亭として活用されています。文政元年（1818)、田中源治は、中宿で近江の麻織物や蚊帳などの行商をはじめ、嘉永年間には江戸に進出し、京都にも店を構えました。田中新左衛門は、三代目の娘婿にあたります。

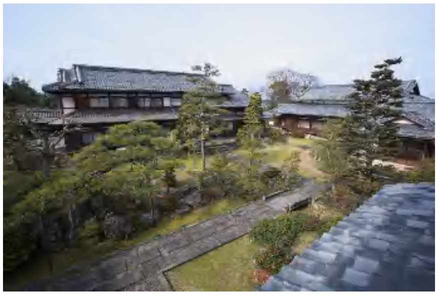
建物は、明治 25 年（1892）に建てられた南土蔵の周囲に、大正８年（1919）になって主屋、茶室、北蔵、大広間を新築し、現在のような屋敷構えになりました。料亭として開業するにあたり、建物の南側に厨房を新築していますが、庭園を含めほぼ昔ながらの景観を保っています。広い玄関をはいると、正面に南蔵があり、その脇に 11 畳の畳が横向きに敷かれた廊下があり、16 畳の大広間に続きます。玄関の左手には、36 畳の表座敷（主屋）が広がり、その奥には茶室があります。茶室は、中山道に面して立つ北蔵につながっています。

庭園を望むことできる大広間、主屋、茶室は、それぞれ床構えの意匠の異なり、変化に富んだ室内空間が楽しめます。

・・・

法量･構造等	主　屋･･･木造２階建、瓦葺、建築面積 181 ㎡
	大広間･･･木造平屋建、瓦葺、建築面積 80 ㎡
	茶　室･･･木造平屋建、瓦葺、建築面積 35 ㎡
	南土蔵･･･土蔵造２階建、瓦葺、建築面積 38 ㎡
	北土蔵･･･土蔵造２階建、瓦葺、建築面積 27 ㎡、置屋根形式
参 考 資 料	白木正俊「近江商人亭（旧田中新左衛門邸)」(『近江 愛知川町の歴史』第四巻、愛荘町、平成 19 年)
	近江商人亭リーフレット
	愛 荘 町「有形文化財の登録について」(報道資料、平成 20 年)

蔵元　藤居本家 ふじいほんけ		滋賀県愛知郡愛荘町長野1769	0749-42-2080
藤居本家住宅主屋	1 件	大正 5 年頃建設	平成 12 年 12 月 20 日登録
藤居本家住宅書院	1 件	大正 5 年頃建設	平成 12 年 12 月 20 日登録
藤居本家東蔵仕込蔵	1 件	大正 12 年頃建設	平成 20 年 10 月 23 日登録
藤居本家東蔵清酒蔵	1 件	大正 12 年頃建設	平成 20 年 10 月 23 日登録
藤居本家東蔵試験室及び受検室	1 件	大正 12 年頃建設	平成 20 年 10 月 23 日登録
藤居本家東蔵煙突	1 件	大正 12 年頃建設(昭和前期改修)	平成 20 年 10 月 23 日登録



藤居本家は天保２年（1831）から酒造を営む老舗で、長野の大隴神社の周辺に、様々な建物が分散して建てられています。総欅造りの店舗の奥に、住宅主屋・書院があります。これらは、大正５年頃に蒲生郡日野町の中井源左衛門家主屋としての建てられたもので、昭和 30 年代に移築されました。移築前は主屋の座敷奥に書院が繋がっていましたが、移築の際に切り離され、主屋とＬ字型に直交する形になりました。

大隴神社の南側には、清酒蔵、仕込蔵、試験室及び受検室などからなる東蔵があります。これらは、大正 12 年（1923）頃に建築されました。煙突は、酒米を蒸す巨大な甑のために設置されており、赤い煉瓦が、白い漆喰の壁によく映えます。平成９年（1997）のＮＨＫ連続テレビ小説「甘辛しゃん」や、平成 20 年（2008）ＮＨＫスペシャルドラマ「最後の戦犯」などは、この東蔵でロケが行なわれています。

・・・

法量･構造等　　住宅主屋･･･木造２階建、瓦葺、建築面積 328 ㎡
住宅書院･･･木造２階建、瓦葺、建築面積 227 ㎡
東蔵仕込蔵･･･土蔵造２階建、瓦葺、建築面積 380 ㎡
東蔵清酒蔵･･･土蔵造２階建、瓦葺、建築面積 728 ㎡
東蔵試験室及び受検室･･･木造平屋建、瓦葺、建築面積 90 ㎡
東蔵煙突･･･煉瓦造、高さ 11m

参 考 資 料　　白木正俊「藤居本家」（『近江 愛知川町の歴史』第四巻、愛荘町、平成 19 年）
滋賀の日本酒を愛する酔醸会編『近江の酒蔵』（サンライズ出版、平成 17 年）
愛 荘 町「有形文化財の登録について」（報道資料、平成 20 年）

西澤家住宅洋館 にしざわけじゅうたくようかん	滋賀県愛知郡愛荘町市		
西澤家住宅洋館（旧伊藤製材所社屋）	1件	昭和前期建設（平成３年移築改修）	平成 20 年 10 月 23 日登録

近江鉄道の駅前には、かつて建設請負業・材木業を行っていた伊藤製材所があり、大正期から昭和初期にかけて、周辺地域の役所や学校、公共建造物の建設に携わりました。木材の搬出入のために、近江鉄道の引込み線が敷地内に敷かれていたそうです。

この建物は、伊藤製材所の社屋として建てられたもので、当時は１階が事務所、２階は従業員の宿泊する部屋として使用されていました。昭和 64 年（1989）に西澤基治氏が江麻商会から買い受け、その後、平成３年（1991）に６ｍほど後ろに曳家し、前庭を設けました。

外壁は下見板張で、玄関を中心に縦長の窓を左右対称に配置し、全体に洋風の意匠でまとめられています。空色の塗装は、後世のものです。

玄関を入って右手にある階段は、踊り場をつくらない「まわり階段」になっています。階段の底部は、美しい曲面を描いています。階段の親柱は、直線を基調とするデザインからなり、ゼツッション（Sezession）の影響がみられます。

ゼツッションとは、19 世紀末のウィーンを中心とする芸術家のグループです。中心人物はグスタフ・クリムトで、彼らはアール・ヌーヴォーやアーツ・アンド・クラフツなどに影響を受け、モダンデザインに大きな影響を与えました。伊藤製材所が施工した愛知郡役所にも、ゼツッションの様式がみられます。

・・

法量･構造等	木造２階建、瓦葺、建築面積 59 ㎡、半切妻造
参 考 資 料	白木正俊「西澤基治別邸（旧伊藤製材所社屋）」（『近江 愛知川町の歴史』第四巻、愛荘町、平成 19 年）
	愛 荘 町「有形文化財の登録について」（報道資料、平成 20 年）

蔵元　丸中醤油 まるなかしょうゆ		滋賀県愛知郡愛荘町東出229	0749-37-2719
蔵元丸中醤油店舗	1件	明治前期建設	平成 20 年 10 月 23 日登録
蔵元丸中醤油大蔵	1件	江戸後期建設	平成 20 年 10 月 23 日登録
蔵元丸中醤油前醸造蔵	1件	明治前期建設	平成 20 年 10 月 23 日登録
蔵元丸中醤油奥醸造蔵	1件	明治中期建設	平成 20 年 10 月 23 日登録

蔵元丸中醤油の起源は、寛政年間に創業の醤油醸造蔵に遡ります。その後、大正 14 年（1925）に中居金次郎が蔵を譲り受け、その時から「丸中醤油」の屋号が使われ、今に至るまで古式製法をまもった醤油の醸造と販売を行なっています。

県道に面して店舗と前醸造蔵が並び、店舗の奥には大蔵が、前醸造蔵の奥には奥醸造蔵が接続して建っています。明治中期の建築による２階建ての店舗は、高さが抑えられた外観をもち、落ち着いた佇まいをみせています。

江戸時代後期に建てられた大蔵の中には、たくさんの杉樽が設置されています。明治前期に建てられた前醸造蔵と明治中期の奥醸造蔵は、ともに醤油の醸造に使用されている蔵ですが、奥醸造蔵は当初、麹蔵であったと伝えられています。これらの蔵には、天井、壁、床、樽、桶など、いたるところに灰白色の醸造菌（微生物）が棲みついています。蔵全体が醤油醸造には欠かせない環境で、丸中醤油では戦争で醤油が作れなかった時にも、水をかけるなどして菌を守ってきたといいます。

平成 20 年 8 月から着工した耐震補強工事は、醸造菌が住む建物の内部には手をつけず、外部からの補強をするという難工事で、屋根瓦を軽いものに変えたり、4 つの棟をボルトで固定して一体化させたりするなど工夫がこらされ、伝統的な味を守りました。

・・・

法量･構造等　　店　　舗･･･木造２階建、瓦葺、建築面積 59 ㎡
大　　蔵 ･･･木造平屋建、瓦葺、建築面積 220 ㎡
前醸造蔵･･･木造２階建、瓦葺、建築面積 68 ㎡
奥醸造蔵･･･木造２階建、瓦葺、建築面積 47 ㎡

参 考 資 料　　丸中醤油パンフレット
市丸茂樹「伝統の味　揺るがぬ―しょうゆ蔵を耐震補強」（朝日新聞・滋賀版、平成 21 年 1 月 23 日付）
愛 荘 町「有形文化財の登録について」（報道資料、平成 20 年）

宇曽川流路工 うそがわりゅうろこう	滋賀県愛知郡愛荘町松尾寺		
宇曽川流路工	196m	大正元年竣工	平成 13 年 10 月 29 日登録

宇曽川流路工は、雨水や湧水による山腹斜面の侵食を防ぐ砂防施設として建設された排水路(溝)で、宇曽川ダムの上流 1.8km。平成の名水百選に選ばれた「山比古湧水」から 10 分ほど宇曽川渓谷を歩いいた唐櫃ケ淵の右岸斜面にあります。

宇曽川上流の秦川山、向山などは、江戸時代の中頃以降、薪材濫伐のために荒廃が進んだといわれています。明治時代になって、ヒメヤシャブシや松などの植栽による緑化への取組みや、砂防堰堤を建設するなど、砂防工事も実施されました。宇曽川流路工もその一環として、明治 44 年(1911)から大正元年(1912)にかけて施工されたものです。

宇曽川流路工は、宇曽川の自然石を丁寧に敷きならべて造られており、保存状態がよく、当初の姿をとどめています。山肌にまっすぐ伸びた本川の勾配は約 39%で、全長は 135mですが、支川を含めると、延べ 196mに及びます。

愛荘町で見られる国の登録有形文化財のなかで、土木遺産はこの一件のみです。

法量･構造等　石張水路工、張石の欠円断面排水路、196m

参 考 資 料　愛荘町ホームページ「文化財」 http://www.town.aisho.shiga.jp/main/03_kyouikubunka/03_bunkazai/01_bunkazai.html

国土交通省ホームページ「登録有形文化財に登録された歴史的砂防施設」

http://www.mlit.go.jp/river/sabo/bunkazai/index.html

愛荘町でみる 国の登録有形文化財 関 係 地 図

国土地理院発行の 5 万分の 1 地形図をもとに作図した

愛荘町でみる　国の登録有形文化財

平成21年（2009）3月1日発行

編集　愛荘町愛知川観光協会

発行　愛知川駅ギャラリー　るーぶる愛知川
〒529－1313　滋賀県愛知郡愛荘町市 895-3
電話　0749－42－8444